

平成 27 年 9 月 30 日

南の風 151

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

パスやドリブルでアングルを変えるとパスが入り易くなります。今回紹介したのは一例ですが、私が観たゲームでは、所沢山口の選手は理に適った動きや合わせをすることが多かった。オフボールマンが動く意図やボールマンのパスする意図が、他のチームより明確だった気がします。ですからボールを受ける前から、「**ボールをキャッチしたらシュートする**」という目的意識がはっきりしていました。

したがって、シュート確率も全試合通じてよかったのだと思います。

オフェンスを緻密に組み立てるキーワードは、目的意識（WILL）だと強く感じました。

ディフェンスの感想です。

二例挙げます。一つ目は二島VS坂本の予選リーグのゲームです。

このゲームでは、二島のオールコートマンツーマンディフェンスが光りました。二島は、ボール運びに時間を掛けさせることをねらいとしていました。そしてフロントコートでは、坂本のガードに間合いを詰め、パス出し特にポストへの合わせを封じていました。また、坂本のスーパーセンター（180cm）には、マッチアップディフェンスがフルフロントで付き、3線のディフェンスが裏のカバーに当たっていました。パスがセンターに入った瞬間には、ダブルチームからのトレースでプレイをさせませんでした。**出だしの1Pから徹底した**ことで、坂本のセンターは、思い通りにプレイができず、心理的にフラストレーションが溜まったようでした。彼女は、エルボー当たりのシュートも得意なのですが、決定率が上がりませんでした。

結局、この1Pの19対6のスコアが最後まで響きました。二島のディフェンスの勝利でした。

指導者は、「ポストディフェンスは、こうしてこうやればいい。」とみんな分かっています。選手も分かっているチームが多いと思います。しかし、**徹底することと大事なところでやり切ることが難しい**のです。LOOKによる読み・予測、集中力の持続、経験値が鍵になります。

一つ付け加えておきます。このゲームを経験した坂本は、この後予選リーグを2位抜けして、決勝リーグに進み、決勝トーナメントでベスト4になります。負けはしましたが、この二島戦は坂本のベンチと選手にとって大きな収穫があったゲームでした。私はこの敗戦（二島のディフェンスの経験）が、決勝リーグの準決勝戦で優勝した所沢山口を、あと一步のところまで追いつめた原動力になったのではないかと感じました。二島戦の経験が、坂本を一回り成長させた感じがしました。

二つ目は、優勝した所沢山口のディフェンスです。予選から決勝リーグを通じて、1Pのディフェンスの集中力が光りました。1Pはほとんど相手チームの得点を一桁に封じています。決勝の布水（石川）戦でも17対10でした。所沢山口のディフェンスのよさは、フットワークやポジショニングもさることながら、一番の凄さはビジョンと相手チームのプレイの読み・予測だと、私は思います。予選リーグの藤枝順心（静岡）戦、名陵（山口）戦は、オールコートのマンツーマンが炸裂した感じでした。ボールマンに対する寄りが早いのと、次のプレイへの反応（瞬時に見るべきポイントの確認とレシーバーのチェック）が素早いと、相手チームはボール運びが、極端に制限されていました。